

(三) 英國の新聞通信検閲

(「トレバ」誌十月號、アール、ビー、サゲース署名)

左記は英國労働黨、労働組合を骨子とする政府反対の英國労働組合全議の機関紙「トレバ」誌に於ける倫敦一部に於ける検閲に対する不平の聲と一記載す。

倫敦に於ける検閲が其の結果に於て又英となり親獨となる程に統一であり、政策的であり、差別的であり、破壊的であり、非武士道的であり、笑ふべきものであり、無効果的であり、不信用のものであり、又不適切なものであることの證據書類が澤山にある。

第一次世界大戰が第二年に入つた頃であつた、倫敦駐在の米國新聞通信員の一人が親英派の評論家が英國の検閲に就て手厳しい批評を發表して一々右形容詞に該當の事実を説明したことがある。彼は自分の職業の妨害及び雇主の損害の點から憤慨したのであるが又斯かる検閲振は英國國民の意氣に及ぼす結果を痛心したのである。

内務省

本年創設された英國情報省は戦争が始まってから一週間を経た
ちの中に早くも前記形容詞の二三に該当する過誤を演じたのである。
そして自から其の過誤を認めて、草創の際の過誤だと辯解し、思ひき
つた改善を約束したのである。

非常時の際として之が爲に甚しく痛痒を感じる新聞社も公衆も其
慢して餘り烈しく批難を加へないのではあるが、當初から一部の
人々は情報省創設の當否を疑つたのである。上院に於ける討論中議
員カムロースは情報省設立に就ては内務省代表と新聞社代表間に幾回
か協議会を開き、新聞代表は其の設立と職員の問題に反対したの
であるが結局設立に決定した経緯を指摘し、情報大臣ロード・マクミラン
は其の改革を約したのである。

それにしては情報省が適當な職員から成つてゐるならいふやう
な過誤は起うなかつたのであつて其の過誤は、英國軍の佛蘭西到着
の記事等何れも前回大戦のときの過誤を繰り返へてゐるのである。

内務省

ロド・カムロースは上院で質問して英軍の佛蘭西到着の記事は許可されて金曜日の朝刊が報道したので全世界に知れ渡つてゐるのに、それを何故公表しなかつたか、敵の知つてゐることを公表したとて敵を利することは存ひばないかと詰問した。

又キール運河を襲撃した英國航空隊員三名が行方不明になつたのを何故発表しなかつたか、此の件に就て獨逸の放送局が右三名との会談を放送したのを、英國の放送局は獨逸の放送は捏造であるかの様に放送し吾々は翌日までさうかと思つてゐると、其のときになつて情報者は獨逸の放送の眞実なことを確認した。

前回の大戰のとき、一九一四年十一月ロバート・ブラウツケフオードは佛蘭西に渡つて印度兵の陣營を觀て、考慮の末差支なしと考へて此の事をウイリー・デイスバッハに登載しようとしたところ検閲官は此の記事を削除してしまつた。そこで彼は検閲官に向つて印度兵が佛蘭西に居ることば全世界が知つてゐる、掲載したとて何も獨逸人の知見ないこと

内務省

を知らせることにはなうないではないかと質問したことがある。此の様を可笑な検閲振の例がとうもある點か考へると情報省の職員は前回の大戰かう教訓を受けつゝ人々の目を考へられる。

今一九一九一五年と一九三九年の検閲について似てゐることは一九一五年の新聞局長サー・スタンレー・バックリマス（後にロートとなる）も現情報大臣ロート・マクミランも共に辯護士であること、米國批評家ロート・ブラウツケフォードは曾て前者に就て「此の非常時に新聞検閲を大法院の辯護士に委ねるのは丁度僧正を陸軍大佐にしたり警察署長を新聞記者にするやうなむねの如く皮肉をいふたことがある。然何もなくサー・スタンレーは更迭した右評論家の言に依れば其の後の検閲は中心を失は各省本各自に検閲を行つて不統一を極めたのである。

議員アーサー・グリーンウッドは下院の討論で発言し「軍部と情報大臣は完全に協力しなくてはなうぬ。前回の戦争では甲の新聞に許可された記事が乙の新聞には禁止されたといふやうな不統一で

夕

あつたが、これはどうしても軍部関係大臣が干渉することをして情報
大臣一人が責任を以て監督しなくてはならぬ。而して横報大臣は軍部
の首脳部と毎日接觸すると共に名聲あり経験ある一流操縦者と
接觸することが必要である」と述べた。

今日は誰が最後の決定をしてゐるか知れないが、やはり金ピカの
軍部がやうてゐるのであつて恐らく情報大臣はなかうう。前回の
戦争にもモツチナール元帥あたりが永く其の句に當つてゐた事は従
軍記者などは全部絞罪にたり、獨立自主の通信員は何も記事
ことを許されなかつたかも知れない、好む敵を益するやうな記事を掲げ
る新聞紙もなかううにはないが、而も前回の検閲振と似た無駄といは
うか、杜撰といはうか、實際國民精神を沮喪せしむる衣のそのであつた。

鬼に用事實を報道しなくてはならぬとグーリンウットはいつてゐるが、
實際前回は鬼へずと奥としやかな嘘を聞かされた、戦闘と異戰闘
は皆何れも聯合國軍の勝利であり、英國の將校は何れもがサポ

内務省

レオンであつて戦争其のそりが小説的であつた、彼等はかうして國民の精神を鼓舞しやうとしたのであつた、然るに暫くすると負傷兵が歸還して實際を語るといふ始末、一人の兵は自分の所屬砲兵隊は一日四弾以上発砲を禁ぜられたとハロルド・スペンダーに語つた、スペンダーは砲弾缺乏を敵に知られると考へたりだうう之を發表しなかつた、然し発砲しなかつた事實が事實を説明する由ではなかつた。

今回は金ピカの抹殺者を排除しなくてはなうない、今度は其の員數も前回より多いと思はれるが幸のことには情報大臣ロイド・マクミランは此の事實を認め上院で「吾國のやうな民主國に在つては軍部と雖も、軍機に觸れざる限り又作戦の効果を害はざる限り、戦場戦線と並んで國內戦線があり、國內戦線の精神、士氣を維持することは戦場戦線の精神、士氣の維持と同様に勝利の上に貢獻するものであることを記憶して、可成公表主義であることが必要である」と陳へてゐる。

内務省

實際國內戦線も爆弾が投下されるやうなことがあるが、此の場合に於ても兎に角國民は何處に爆
線となるのであるが、此の場合に於ても兎に角國民は何處に爆
弾が投下されるかを知ると欲するのである。